真紅のアリス

堀形　澪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真紅のアリス

【Ｎコード】
Ｎ９６５９Ｏ

【作者名】
堀形　澪

【あらすじ】
「殺戮の舞台へようこそ」平穏な生活を送っていた少女は、突如として異世界に召喚される。彼女に用意されたのは、凄惨な殺戮の舞台。こうして惨劇の幕が開ける――。

途中経過

彼女は歩いていた。

彼女は自身が通う学校の制服を着ていた。ブレザーは紺、スカートは赤が混じったタータンチェック。今時の娘らしく、スカートは規定よりも短くなっていた。

染められることのないその黒髪は、頭の上で纏められている。所謂ポニーテール。その髪を纏めているのは、真っ赤なリボン。

彼女が歩いているのは、屋内。廊下だ。高い天井と広い通路、片側に点々と並ぶドア……どこかの城だと言われても遜色はない。

ふと、彼女は口を開いた。

「……あと、何人いるの？」

すると、傍らに付き添っていた男が答えた。

「十人。君があと一人殺せば、一桁になるよ」

男は物騒なことを口にするが、彼女は否定をしない。

「……私じゃなくても、いいでしょ」

どこか苛立たしげに吐き捨てる。男は肩を竦めた。

「そうだね、君はそう言う子だ」

「……」

男の物言いに、彼女は顔をしかめただけだ。
そのまま、二人は黙り込んだ。黙って、足を動かしている。
やがて、二人は行き止まりに辿り着いた。足を止める。
男が口を開いた。

「参加者はこのフロアにしかいないよ」
「なら、戻る」

彼女は身を翻した。男も後に続く。
廊下は広いだけではなく、長かった。薄暗いため、廊下の一番向こうは見えない。
彼女は再び廊下を歩き出した。並ぶ部屋には、目もくれない。
三十秒程歩いた時、彼女の足は止まった。男も止まる。
それなのに、足音は止まらなかった。

「……」

彼女はじっと、前を見据える。
やがて、前の暗がりから一人の少女が歩いて来るのが見えた。
襟の部分が水色をしたセーラー服を着た少女だった。その脇には、男が控えている。
少女は彼女を見て、びくり、と肩を震わせた。
だが、すぐに彼女を睨みつける。

「水色のアリスだよ。やる気は満々ってことだね。ま、しょうがないか。そうでもしないと、生き残れないものねえ」

男が楽しそうに相手の様子を告げる。彼女は眉を寄せただけだ。
すると――何の前触れもなしに、彼女から少女へ向かって火柱が駆け抜いた。
少女は顔を強張らせたが、落ち着いて対処した。
どこからともなく水が降って来て、火を全て消したのだ。
「！」
彼女は息を呑む。
「あらら……火と水って、相性悪いよねえ……」
言葉だけを見ると残念そうだが、口調は楽しそうに聞こえた。
彼女は顔を引き攣らせた。
「あんた……知ってたでしょ」
「まあね。でも聞かなかったのは君だよ？」
彼女が何か反論しようとした矢先、上から水が降って来た。それは彼女を見事に直撃する。
その水はそのまま、滝のように流れ続けた。
だが、男の態度は変わらない。
「……こんな水じゃあ、君は殺されないはずだよ。『真紅のアリス』」
するとその言葉に応えたかのように、滝に穴が生じた。

「その呼び方、やめてほしい」
今度息を呑んだのは、少女の方だった。
彼女の周囲には、炎。水はそれを避けている。
「知らないの？」
彼女は指を少女に向ける。
「水って、熱すれば蒸発するんだよ」
再び火柱が、彼女から少女へ駆ける。水は、炎に届かない。
すぐに、火は少女に纏わりついた。
悲鳴が絶叫に変わり、やがて断末魔となる。
身体全てを炭化させた「死体」は、その場に倒れ込んだ。
男が、にやりと笑う。
「これであと九人……君のおかげだね」
彼女はそれを無視して、再び歩き出した。

非日常への予兆

菅野朱美は、ごく普通の女子高生だ。

普通の家族。普通の友達。普通の生活。普通の恋。

世界を退屈する程に、朱美は普通だった。

毎日が同じ世界に、ある日ちょっとだけ異変が起こった。

「菅野のことが……好きなんだ」

手紙で呼び出された校舎裏。

新屋というクラスメイトに、告白された。

幸運なことに、新屋のことは朱美も気にかけていた。

だから、新屋の告白に驚きを見せたものの、すぐに了承の返事をした。

これからの毎日に、ちょっとしたスパイスが投入された。

しかし――真の非日常は、これから始まる。

「じゃー、朱美が晴れて彼氏持ちになったってことで……今日は朱美のおごりね！」

「えー、何それ。普通逆じゃない？」
「何言ってんのー。あんたの幸せを、私にも分けろってこと！」
「もう、しょうがないなあ……」
行きつけのファミレスで、朱美は友人におごる羽目になった。だが、幸せである点では否定をできないので、まあいいか、と思っている。
いつも頼むパフェより、少し高いものを注文する。お祝いのつもりである。
「まー、それにしてもよかったわねえ。新屋と恋人になれて。あんた、新屋のこと好きだったもんねえ」
「や、やめてよ……」
友人の真子にからかわれ、朱美は顔を真っ赤にさせる。
真子はアイスを口に入れると、
「ま、これで私だけが一人者ってことだ。いいなー、いいなー」
「真子も、好きな人を探せばいいじゃない」
「いやー、私に吊り合う男はまだいないなー」
そんな会話をしながら、パフェを食べる二人。
やがて食べ終えて、二人はファミレスを後にした。
「どうする？」
「もう遅いし、帰ろっか」
朱美も真子も、通学には電車を利用している。だが路線が違う。必然的に二人は駅で別れることとなるのだ。

「じゃーねー」

真子と別れ、朱美は自分が使っている路線の電車に乗り込む。
電車に揺られながら、朱美は改めて今日のことを反芻する。
内容はもちろん、新屋からの告白。
顔がにやけるのを感じながら、朱美は目を閉じた。

明日からは、いつもと違う毎日が始まる。
それはいつか、いつもと同じ毎日になるだろう。
それが、朱美にはとても嬉しかった。

家に一番近い駅で降りる。朱美はこれから自転車だ。
自転車を走らせる。浮かれているからか、いつもよりペダルが軽い。
だから、異変に気がついたのは、信号待ちをしている最中のことだった。
何気なく後ろを振り返った時、背後の風景は一変していた。

闇が、迫っていた。

「え……！？」

何も見えない真っ暗な「闇」が、十メートル程背後に迫っていた。

徐々に、徐々に、闇が近づいてくる。

その闇が一メートルにまで迫った時、朱美は信号が赤でありながらも自転車を走らせた。

後ろを振り向くと、闇が追いかけてきていた。

朱美は必死に自転車を漕ぐ。

何が起こっているのかは知らないが、あの闇に捕まるとろくでもないことが待っている。朱美は半ば確信を持って逃げていた。

息が上がり、足が疲労の色を見せ始めた頃。

朱美はようやく、家に着いた。

家の中に入れば、大丈夫。あれはもう、追ってこないだろう。

朱美は自転車を庭に乗り捨て、玄関に駆け込んだ。

闇。

そこには闇が広がっていた。

「……！」

何が起こったのか理解するより早く――、

朱美の体は、闇へと落ちていった。

惨劇開始

目が覚めると、白と黒のチェス模様の床が最初に見えた。
起き上がると、朱美はまったく知らない部屋の中にいた。

「目が覚めたかい？」

ぎょっとして振り返ると、そこには男がいた。

青のメッシュが入った黒髪。真っ黒なベストを着ていて、そこには青のスペードが一つ描かれていた。それを除けば、ワイシャツもズボンも黒ずくめだった。

「殺戮の舞台へようこそ、真紅のアリス」
「あり……す？」
「君のことさ」

男は朱美の傍に跪いた。

「私はスペードのエース。審査の間、君の相棒を務めさせてもらう」
「審査……相棒……？　ど、どういうこと？」
「そうだね、順を追って話そう」

スペードのエースは、少し考えるような沈黙をした後、おもむろに言った。

「まず、ここは君がいた世界ではない」
「え……」
「異世界って言った方が正しいかな。ま、私達にしてみれば、君が

いた世界の方が異世界なんだけどね」

くどい言い回しをする。朱美はヒステリックに叫んだ。

「要するに！　ここはどこなの！？」

「だから、君がいた世界とは違う世界さ。それ以上でもそれ以下でもない」

「じゃあ私はどうなったの！？」

「君がいた世界からこちらへ、召喚されたのさ」

なおも叫ぼうとする朱美を、スペードのエースは制した。

「今この城には、君と同じように召喚された『アリス』が二十九人、君を含めると三十人いる」

城、と聞いて、朱美は改めて部屋の中を見回した。

高い天井、広い部屋。確かに城と言われてもおかしくはない。だが実感がない。実感を得るには、外から見るか、中を歩き回るかしないとムリだろう。

で？　朱美は話の先を目線だけで促した。

するとスペードのエースは、殊更楽しそうに続けた。

「今から君は、その二十九人の『アリス』と殺し合ってもらう」

「！」

「生き残れるのは一人だけ。生き残るか死ぬかは、君次第。ちなみに君は『真紅のアリス』だ。そのリボンが示している」

ショッキングなことを言われて、朱美は全身から力が抜けるのを感じていた。立っていたら、間違いなく座り込んでいただろう。

今ここで行われるのは、まさしくバトルロワイヤルだ。残り一人になるまで殺し合い続けなければいけない。映画にしか聞いたことないような、過酷な現場。

それを、自分がやるのか――？

「真紅のアリスは、炎を使うよ。ぶっちゃけた話、君は有力候補の一人だ。後は漆黒のアリスくらいかな？」

どこか楽しそうに話し続けるスペードのエースに、朱美は力なく抗った。

「……棄権するってのは……ないの……？」

「認められないね。そんなことを言って、私をがっかりさせないでくれるかな？」

逃げ道は、ないようだ。

しかし、朱美は覚悟を決めれないでいる。異世界とは言え、人を殺してしまうことに躊躇いがあった。

自分は、普通に日々を過ごしたいだけなのに。今までの日々が、真子とのやり取りが、新屋の告白が、頭の中をよぎる。

「……」

そうだ。自分は帰らなければいけないのだ。

だが、そのために人を殺して、いいの――？

「人の幸せは、誰かを犠牲にしなければ得られないものなんだよ」
「その犠牲が……ここにいる人達なの……？」
「そうだね」

スペードのエースはさらりと言う。おぞましい男だ。朱美は内心で嫌悪した。

「もし私が最後の一人になったら……元の世界に帰れるの？」
「おや、最後の一人になる気があるのかい？　それはよかった。そうだね、君には目的があるものね」

目的。

元いた世界に帰ること。

「そのためには……手を汚さないと……ね？」

スペードのエースの囁き。

そう、元いた世界に帰って、今まで通りの生活を送りたい。
そのためには、手を汚すことを厭わないことが必要だ。
だが朱美は、まだその答えを出せないでいた。

定まらない覚悟

「……何をしているんだい、真紅のアリス」

せっせと部屋の中のものを動かしている朱美を、スペードのエースは半ば呆れながら眺めていた。

「隠れるスペースを作るの」
「それで、どうする気だい？」
「人数が減るまで、隠れてる」
「随分と消極的な案だね」

スペードのエースはそう言って、やれやれ、と言わんばかりに首を振った。

「人を殺すことが、相当嫌に見える」
「……」

図星を突かれ、朱美は黙り込んだ。その間も、体は動き続ける。

スペードのエースの言うとおり。朱美は、誰かを殺すと言う行為を認めたくなかった。
だから、この行動に出た。なるべく「殺す」と言う行為を避けるための作戦だ。

その場にあったクッションを積み上げると、朱美はそこに隠れた。

「ほら、あんたも」
「仕方ないね」

スペードのエースは朱美の言うとおり、朱美の隣に隠れた。
「しかし、いつかは決断をしなければいけないよ。これはその場しのぎの作戦だ。いつかは誰かを殺さなくてはならない」
「分かったから、ちょっと黙ってて」
スペードのエースは、肩を竦めて黙り込んだ。
……彼の言うとおり。
この案は確かにその場しのぎのものだ。人数が少なくなれば、通用しなくなる手。
だがこの案は、「人を殺す」と言う覚悟を決めるための猶予期間である、と朱美は自分に言い聞かせた。
いつかは人を殺さなければいけないのならば、心の準備が必要だ。自分は人を殺すことを楽しむような人間ではない。
だから、覚悟が決まるまで、隠れることにする。
……心臓の音が、やけにうるさい。どうやら自分は緊張しているようだ。
落ち着け。落ち着くんだ。
目的を果たすために、まずは落ち着け、自分――。
ドアが開く音がした。その音に、飛び上がらんばかりに驚く朱美。
見ると、黄色を基調としたパジャマを着ている少女が、室内を見回している。

「パジャマ……？　あの子、一体いつ召喚されたの？」
ほとんど独り言だったが、スペードのエースは律儀に答えた。
「召喚された時間は、ほぼ一緒だよ。年齢も同じ。風邪か何かで休んでいたか、たまたま学校が休みだったのか、学校に行かない引きこもりかのどれかだろうね」
成程、と朱美は頷いた。
少女は室内に入り、きょろきょろと室内を見回している。その隣には、スペードのエースと同じ顔と格好をした男がいた。違うのは、メッシュが黄色であることと、ベストに描かれているものが九つのダイヤであることだ。
「あれは黄色のアリスだね。隣にいるのが、ダイヤのナイン。黄色のアリスの相棒さ」
「あなたと同じ顔をしているのは、なぜ？」
「同じトランプ兵だからだよ」
アリスにトランプ兵。「不思議の国のアリス」のようだ。朱美はそれを読んだことはないが、こんな殺戮が行われるような物語ではないはずだ。いや、ハートの女王はちょっと残酷だったかな……？
「それにしても、今がチャンスじゃないかなあ。黄色のアリスは、警戒こそしているものの、誰もいないと思っているよ？」
もう黙っててていいよ、と言おうとして、それは叶わなかった。
開けっぱなしのドアから、制服を着た少女が入って来た。
ぎょっ、と黄色のアリスは振り返る。

「あれは……」
「緑のアリスだね。リボンが緑色だろう？」

緑のアリスが着ている制服の棒タイ。それが緑色だった。
朱美が固唾を呑んで状況を見守っていると、緑のアリスの足元から蔓が伸びた。その蔓は、一直線に黄色のアリスへ向かう。
蔓は黄色のアリスの首に絡みつき、絞め上げる。
黄色のアリスはしばらく暴れていたが、やがて大人しくなった。
どさ、と黄色のアリスの体躯が床に倒れる。ぴくりとも動かなかった。
それを見た緑のアリスは、もう興味を失ったかのように、部屋を後にした。

「……これが、今君が直面している現実だよ」

スペードのエースが、静かに言った。

「もう既に賽は投げられた。後は君が決意するだけだ」
「……」

朱美は呆然と、緑のアリスが出て行った扉を見つめているだけだった。

幻覚対業火

ふと視線を動かすと、黄色のアリスの死体はなくなっていた。

「あれ？」

どう言うことか、スペードのエースに訊こうとした時。

悲鳴が聞こえてきた。

「！？」

朱美は非常に驚いた。城内は、しん、としている。そこへ誰かの悲鳴が聞こえるなど、想像もしていなかったのだ。

スペードのエースを見ると、彼は冷静だった。

「また誰かが、殺されたのかもね」

そう、ここは殺戮の舞台。いつ誰が殺されてもおかしくはない世界。そう考えると、今まで悲鳴が聞こえなかった方が不自然とも言えた。

「じゃあ……また誰かが、減ったんだ」

「そうだね。五人も減ったよ」

さらりと言ったスペードのエースの言葉に、朱美はぎくりと彼を振り返った。

「な、何で分かるの！？」
「今限定で、トランプ兵同士連絡を取り合ってるんだ。でも、他の人達にアリスの現在位置を教えることはないから、安心していいよ」
そう言うことならば、合点と安心が得られる。朱美は胸を撫で下ろした。

それも束の間。
部屋のドアが、またしても開かれた。
今回も、制服を着た少女だった。

「……あれは？」
「桃色のアリスだね。ごらん。履いている靴がピンクだよ」

言われてみれば、彼女が履いているシューズはピンク色だ。
桃色のアリスの傍らには、やはりトランプ兵。今度は黄緑のメッシュに、ベストには大きなクローバー一つの中にＪの文字。おそらくクローバーのジャックだろう。

「気をつけた方がいい。桃色のアリスは、相当切れる」
スペードのエースが言い終わる前に。

「そこにいるんでしょう」

桃色のアリスが静かに、しかしはっきりと言った。
バレた！　朱美の体を緊張が駆け抜ける。
しかし、それでも朱美が物陰から出ないでいると、

「出てこないのなら……こちらからやるわ」

そう言うや否や、朱美の頭上に影が差した。

上を向くと、巨大な「何か」があった。

「きゃあああ！？」

慌てて避けると、今まで朱美がいた場所に金属の塊が落ちてきた。

逃げるのが遅れていれば、金属の塊に押し潰されていただろう。

「な、何今の……」

「桃色のアリスの能力は『幻覚』さ」

スペードのエースが、静かに語る。

「だけど、気をつけた方がいい。幻覚に『殺される』と思ったら死ぬよ」

頭上いっぱいに、ナイフが並ぶ。

そのナイフが、次々と落ちてきた。

悲鳴を上げながら、それらを避けていく朱美。

「ど、どうしたらいいの！？」

「簡単さ」

縋るような朱美の言葉に、スペードのエースはにこりと笑った。

「燃やせばいい。幻覚も、桃色のアリスも」

ずらっ、と並ぶナイフの群れ。

「これで終わりよ！」

全てのナイフが、朱美に向かって一斉に放たれた。

――――ここで死ぬのは、嫌！

朱美は内に燻ぶる感情を、一気に放った。

業火。

まさにそう言った方がいい。

炎が朱美を包み、放たれていたナイフが全て弾き飛ばされた。

スペードのエースが、高らかに笑う。

「そうだ！　その調子で焼き尽くせ！」

言われるがままに、ベクトルを桃色のアリスに向ける。

それだけで、炎は従順に桃色のアリスへと向かった。

「ひッ！」

桃色のアリスが、引き攣った悲鳴を上げる。

だが、もう遅い。

「あああああああああああッ！」

断末魔の悲鳴が、その場を満たした。

残り半分

どさり、と桃色のアリスが倒れ込む。服は焼け焦げ、皮膚は炭化している。
肉を焼いたような、嫌な臭いが充満している。それだけでも気持ち悪いのに、自らが人を殺してしまった嫌悪も相まって、朱美は吐き気がした。
しかし、スペードのエースが残酷な事実を告げる。

「まだ、死んでいないよ。とどめを刺さないと」

彼の言うとおり、桃色のアリスはびくびくと四肢を痙攣させていた。まだ生きていることは明白だ。
しかし、朱美は首を振った。

「……もういいでしょ。追い討ちをかけることはない」
「そんな考えじゃダメだよ、アリス」

朱美の言葉に、スペードのエースは重ねて言った。

「とどめを刺さないと。相手は本気で君を殺しに来ているんだ。ならば君も全力で相手を殺さないと、失礼に当たるよ」
「そんなもの、知らない」

朱美はスペードのエースからそっぽを向く。
すると、視界の端で何かが動いた。
朱美が慌ててそちらを向くと、桃色のアリスが手にナイフを持って起き上がる所だった。

「！」

バネ仕掛けのように勢いよく飛び出す、桃色のアリス。
それに対し朱美が取った行動は、炎を桃色のアリスに向けることだった。

「……！」

最早悲鳴も上げず、力尽きる桃色のアリス。もう動くことはなかった。
驚愕で早くなった鼓動を聞きながら、朱美は一歩後ずさる。

「だから言っただろう。相手は本気で君を殺しに来てるんだから。君の判断があと一歩遅れていたら、相討ちにされる所だった」

スペードのエースは囁くように言う。

「そんな展開はごめんこうむるよ、真紅のアリス」

「……」

朱美はしばらくして、大きく息を吐いた。
すると桃色のアリスの死体が、目の前で消えた。桃色のアリスと一緒にいたトランプ兵も、いつのまにかいなくなっている。

「……どう言うこと？」

「死んだアリスは、元いた世界に戻ることとなる。ただし、遺体としてね」

どこか楽しそうに説明する、スペードのエース。

「ただ、君がいた世界とここの世界は次元が違うから、死体が見つかる時間はばらばらのはずだよ。ま、ここしばらくは彼女らの死体が乱発されて、君がいた世界は震撼するだろうね」

ならば、先程黄色のアリスの死体が消えていたことにも説明がつく。

「……死体となれば、元の世界に帰れるよ」

スペードのエースの提案。しかし朱美はそれを否定した。

「私は、生きて元の世界に帰るの。そんな案は嫌だ」

「そうかい？　私は君のことを思って言っているのだけれど」

朱美はスペードのエースを睨んだ。

「本当に私のことを思っているのなら、その不愉快な案を今すぐ撤回して」

「分かったよ、真紅のアリス。もうそんなことは言わない」

朱美が凄むと、スペードのエースはすぐに前言を撤回した。

「だけど覚えておいて、真紅のアリス。真に元の世界に帰りたいのならば、君はその選択肢を選ばなかったことを後悔することになるだろう」

「……」

朱美は応えなかった。肩を竦めるスペードのエース。

「……さて、こんなことを話している間に、アリスの数は半分にな

ったよ」

半分。つまり、あと十四人。先は長いか、短いか。

「これからもっと人数が減ることになる。そうすると、隠れていると言う作戦は通用しなくなるよ」

「……何が言いたいの」

「分からないかい、真紅のアリス」

相変わらず、回りくどい言い方をする。朱美は黙って先を促した。

「舞台がワンフロアとは言え、ここはかなり広いよ。人数が少なくなると、今度は殺す手間の他に探す手間もかかる。アリスが皆隠れてしまったら、状況はまったく動かなくなるよ」

要するに、と朱美は腰に手を当てた。

「この部屋から出ろ……そう言いたい訳？」

「そう聞こえなかったのなら、もう一度言おうか？」

朱美は眉をひそめた。第一印象から思っていたが、この男は好きになれそうにない。

やがて、朱美は溜息をついた。

「……分かった。出ればいいんでしょ」

「それでこそアリスだ」

スペードのエースに背を向け、朱美は部屋の外へ出た。

続く葛藤

部屋もそうだったが、廊下も天井が高かった。

廊下は少しの灯りしかなく、全体的に薄暗い印象だ。少し先が見えない。闇に紛れるにはうってつけの場所だと言えよう。

そして何より、広い。スペードのエースはここを「城」だと言っていたが、廊下を見ただけで納得できるだけの広さだった。

ここに、あと十四人のアリスがいる。確かにこの広さだと、殺す手間よりも探す手間の方が多い気がする。なんとなく歩いていたら鉢合わせた、なんて展開はまずないだろう。

「とりあえず……隣の部屋に行こうかな」

そう呟いた朱美は、右に行くことにした。スペードのエースが後に続く。

隣の部屋に行くだけで、一分を要した。

「……広いね」

「だから言っただろう。隠れていては、いたずらに時間を浪費していくだけだって」

自分としては、そちらの方がよかった、と今更ながらに思う。

朱美は、未だに心の整理がつかないでいた。一見すると冷静であるが、実際心の中は自己嫌悪でいっぱいだった。

人を殺してしまった。

反射的とは言え、殺してしまった。

スペードのエースの言葉に乗る形だったが、殺してしまったことに変わりはない。自己嫌悪を通り越して、吐き気すら覚える。

これを、あと何回繰り返せばいいのだろう。

やはり、スペードのエースの挑発に乗らず、隠れていればよかった。

そんなことを考えながら、朱美はドアを開けた。

先程までいた部屋と変わらない内装。

違う点と言えば、テーブルの上にケーキと紅茶のセットがある点だろうか。

「おやおや、随分と用意がいいじゃないか」

それを見たスペードのエースが、目を細める。

「……どうする？」

「食べない。そんな気分じゃないし」

朱美はそう言った、その時。

「ざーんねん」

声が聞こえたので、はっとして振り向くと、そこには制服を着た少女がいた。

「それを食べていたら、もう一人減ったのに」

そしてもう一人、別の制服を着た少女も現れる。

「な、何……？」

「青のアリスと、紫のアリスだね」

片方の少女の襟元にあるタイは、青色だった。そして、もう片方の少女はシューズが紫色になっている。

「気をつけて。青は氷を、紫は毒を操るよ」

朱美の頭上に、つららが現れる。

「死ね！」

つららが一斉に朱美に向かう。朱美は慌てて炎を出した。

幸い、つららが小さなものだったので、つららは朱美に届く前に全て溶けた。

「アリス！　注意して！」

スペードのエースが叫ぶ。何に注意しろと言うのか、と朱美が状況を改めて見ると、紫のアリスが何かをしている所だった。具体的に言うと、両手を合わせ、何かを祈るように呟いている。

「早く殺すんだ！」

スペードのエースに言われるまま、炎の矛先を紫のアリスに向けた。

炎が、矢のように紫のアリスに放たれる。

紫のアリスの体が、一気に炎上した。

「お、お前！」

青のアリスが慌てて反撃に出る。

朱美の頭上に、巨大な氷塊が現れた。

さすがにこれは一瞬で溶かすことができないので、朱美は避けるにとどまった。

一瞬の油断が、命取りになる。そう思った朱美は、無我夢中で青のアリスに狙いを定めた。

炎上。

青のアリスは悲鳴を上げて、踊り狂った。既に倒れていた紫のアリスの体に躓き、転ぶ。そのまま起き上がることはなかった。

消えていく、青と紫のアリスの死体。

「……随分と様になったじゃないか」

スペードのエースは喜びをそのまま口にする。

「いい目になってきたよ。それでこそ『真紅のアリス』だ」

朱美はその場に膝をつく。

――自分は人殺しだ。もう過去の自分には、戻れない。

朱美の頬を、冷たいものが伝った。

漆黒との対峙

朱美はその後、部屋には一切目もくれず、廊下を歩いた。この広い廊下で、鉢合わせることなど滅多にないと踏んだからだ。
スペードのエースは、その朱美の考えに気づいているのかいないのか、何も口出しをしてこなかった。

一番端に辿り着き、そこで一人を殺した。人を殺すことに躊躇いがなくなった自分にぞっとしたが、見ないふりをした。

ここは異世界。自分が人を殺したことは、元の世界にはバレる訳がない。そう思った自分に少しだけ自己嫌悪する。

再び歩き出す。今度は反対側の行き止まりに向かって。
しばらく双方とも無言だったが、数分ほどした所で、スペードのエースが口を開いた。

「あと六人。ここにきて、一気に減ってきたね」
「そう」

朱美は素っ気なく言って、それきり押し黙った。

何分歩いただろうか。数分、十数分、数十分。数時間と言うほどではないはずだ。
ともあれ、朱美は長い時間をかけて、廊下の一番端へと辿り着いた。
すると、スペードのエースが楽しそうな様子で実況をした。

「あと二人……あ、一人減った。あと一人だよ。おめでとう、アリス」

あと一人。

あと一人を殺せば、この狂った空間と別れることができる。朱美は何よりも、元の世界に戻ることを渇望していた。

「どうしたらいいの？」

「こう言う時は、ナビをしてもいいことになっている。廊下に出たね。歩いていれば、鉢合わせるよ」

「分かった」

朱美は身を翻した。

十数分歩いたかもしれない。朱美は時間を計っていないので、正確な時間は分からない。

ともあれ、しばらく歩いた所で、朱美は少女と出会った。

真っ黒なセーラー服。真っ黒な長い髪。それとは対照的に、真っ白い肌。手には不釣り合いな、大きなナイフを持っている。彼女の隣には、当然トランプ兵。赤のメッシュに、ベストにはQの文字が入ったハート。ハートのクイーンだろうか。

「漆黒のアリスだ……。有力候補が敵対するなんて、因縁めいたものを感じるね」

「……」

楽しそうなスペードのエースに、朱美はやはり眉を寄せただけだ。
漆黒のアリスは、朱美を見るなり戦闘態勢に入った。
「――覚悟」
そう言うや否や、漆黒のアリスは一直線に朱美に向かってきた。
朱美はすぐに炎を漆黒のアリスに向けた。
炎が放たれる。
しかし漆黒のアリスはそれを避け、ナイフの間合いに入り込んだ。
「！」
朱美は慌てて後ろに跳んだ。一瞬前までいた空間を、刃が薙いだ。
今までの相手とは、格が違う。今のやり取りだけで、そう実感した。
しかし自分にできることと言えば、炎を相手に向けるだけだ。それ以外に方法はない。
漆黒のアリスが、再び朱美に向かって突進してくる。
今度はわざわざ炎を向かわせる技でなく、目標をそのまま炎上させるものに切り替えた。数少ない戦いの中でも、朱美は炎の性質を理解していた。最早炎は、忠実に動く手足のようだ。
その中で、できる限りの最善を尽くす。

全ては、元の世界に帰るため。

しかし――漆黒のアリスは炎に包まれながらも、その走りを止めることはなかった。

火だるまになりながら、朱美に接近する。接近されて、火が移っては困るので、朱美は慌てて炎を解除し、後ろに跳んだ。

漆黒のアリスは、制服を、身を焦がしながらも、立っていた。勝利への執念が垣間見えて、ぞっとする朱美。

「私は……」

漆黒のアリスの唇が、動く。

「私は……勝たねばならない……女王となるために……勝たねばならない……そのために、お前を殺す」

彼女も、夢と信念を持って、行動しているのだ。それは、朱美となんら変わりはない。

自分だって、自分だって――――！

「私は、元の世界に帰るんだッ！」

「ならば屍となって帰るがいい！」

信念と信念がぶつかり合う。

漆黒のアリスが地面を蹴り、朱美は炎を放つ。

決着は、すぐそこだった。

終わらない悪夢

炎の直撃を受けながらも、走ることを止めない漆黒のアリス。

朱美は、もっと炎の威力が上がるよう力を込める。

漆黒のアリスはものともせず、ナイフを振るった。

そのナイフが……朱美の首筋寸前で、止まる。

そのまま、漆黒のアリスは膝からくずおれる。

動くことは、もうなかった。

「……やった……」

朱美の口から、声が漏れる。

「やった……やったんだ……私……」

漆黒のアリスの体が消えるのを見届けて、膝をつく朱美。

すると、スペードのエースが拍手した。

「素晴らしい！　素晴らしいよ真紅のアリス！」

そして、座り込む朱美に近寄って、顔を覗き込む。

「やはり、私の目に狂いはなかった。君が優勝だ。この殺戮の舞台を制したのは、君だ！」

いつの間にか、拍手は大きくなっていた。
周りを見回すと、トランプ兵達が朱美の周りを取り囲んでいた。全員同じ顔なので、かなり不気味な様子を呈している。

「誇っていいよ、アリス。君が勝者だ」

「ありがとう……ありがとう……」

そう……朱美は、この戦いに勝ったのだ。それは他のアリス達との戦いであり、自分自身との戦いでもあった。

襲いかかってくるアリス達。それを殺す自分。殺すことに戸惑いと自己嫌悪を覚えていた自分。

しかし、それももう終わる。終わったのだ。

これで元の世界に帰れる……もう自分は変わってしまったけど、元の世界は自分を迎え入れてくれるだろう。

そう、この殺戮の話は、ずっと自分の胸にとどめておくべきことなのだ。夢を見ていた。そういうことにすればいい。

元の世界に帰ったら、何をしよう。今自分の世界がどうなっているのかは知らないが、もし思った以上に時間が経っているのなら、皆心配している頃だろう。早く帰りたい。

ああ、新屋君の声を聞きたい。あの時は告白で頭がいっぱいだったが、そう言えば携帯電話のアドレスを知らないままだ。帰ったら、訊かなくちゃ。

だが――現実は残酷だった。

「おめでとうアリス。君がこの城の女王だ」

「――――え？」

朱美は、きょとん、とスペードのエースを見た。

「どういうこと？」

「漆黒のアリスも言っていただろう。『女王になりたい』って。この殺戮の舞台を制したアリスは、もれなくこの城の女王になるんだ」

「は、はぁ！？　何それ！」

朱美は、スペードのエースを掴み上がらんばかりに詰め寄った。

「聞いてないよ！？　元の世界に帰れるんじゃないの！？」

「言ってないよ。どちらも言っていない。女王になることも、君が元の世界に帰れないことも」

そう、確かに言っていない。

前者はいい。自分が聞かなかっただけなのだから。

だが後者はどうだ。自分は訊いた。「元の世界に帰れるのか」と。

その時、スペードのエースは何と言っていた？　はぐらかして別のことを言っていなかったか？

それに、いつだったかスペードのエースが言った言葉。「死体となれば、元の世界に帰れるよ」……それは暗に「死体とならなけれ

ば元の世界に帰ることができない」と言うことを意味していたのではないか？

今更ながら、スペードのエースとのやり取りの真相が明らかになっていく。朱美は恐怖で、息をすることさえ忘れていた。

――真に元の世界に帰りたいのならば、君はその選択肢を選ばなかったことを後悔することになるだろう――。

ならば、この戦いに勝利した自分は、自分の世界に、帰ることが……。

スペードのエースは、高らかに言った。

「ようこそアリス！　今日から君は、私達の女王だ！」

スペードのエースの言葉に釣られるかのように、周りのトランプ兵達が次々と声を発し始めた。

ようこそアリス。

ようこそアリス。ようこそアリス。

ようこそアリス。ようこそアリス。ようこそアリス。

ようこそアリス。ようこそアリス。ようこそアリス。ようこそアリス、ようこそアリス、ようこそアリス、ようこそアリスようこそアリスようこそアリスようこそようこそようこそ――――

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああ！」

絶叫は、どこにも届かなかった。

終わらない悪夢（後書き）

これにて「真紅のアリス」完結です。
読了ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9659o/

真紅のアリス

2011年1月2日22時20分発行